

俺は知らないうちに 学校一の美少女を

口説いていたらしい

～バイト先の相談相手に
俺の想い人の話をすると
彼女はなぜか照れ始める～



BOOK☆WALKER限定特典
午前の緑茶先生書き下ろし
ショートストーリー

NOT FOR SALE

©Gozennoryokutya

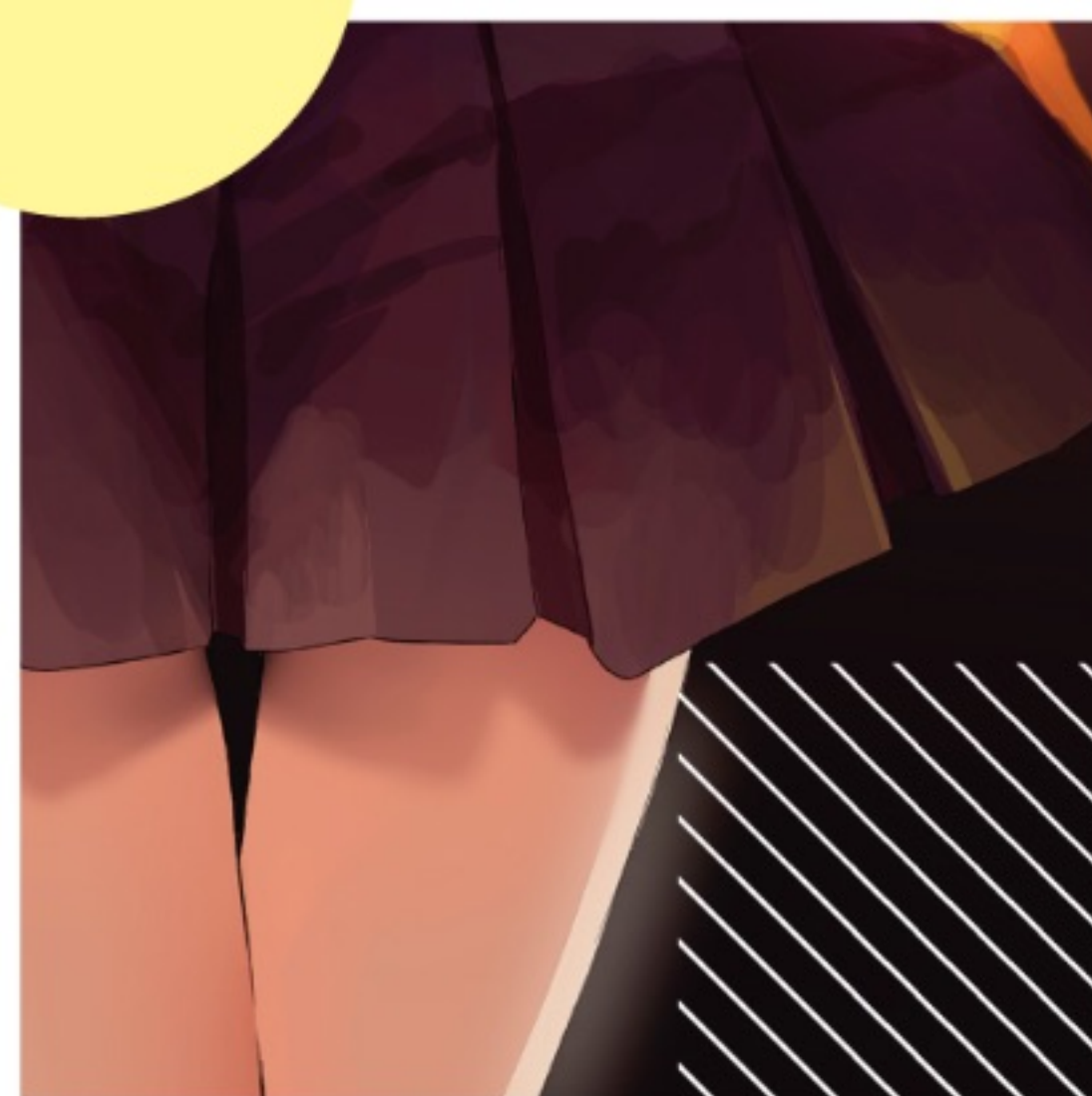


4

| 著 | 午前の緑茶

Gozennoryokutya

| 画 | 葛坊燭



HJ文庫

斎藤玲奈と猫

いつものように斎藤の家でくつろいでいた時のこと。

「これ見てくれよ」

「どうしたんですか？ 田中くん」

対面に座っていた斎藤が俺の隣に座って俺のスマホの画面をのぞき込んだ。ふわりとフローラルな香りが鼻腔を擽る。

「猫、ちゃん？」

こてんと軽く首を傾げる斎藤。だが、その瞳は画面に釘付けだ。

「最近ショート動画で猫の動画を見るのにハマっててな。可愛いだろ？」

「はい、とても」

きっかけは斎藤と一緒に猫カフェに出掛けた時。一匹だけ懐いてくれた美人な猫があまりに可愛く、あれから時々猫の動画を見るようになった。今回見つけた動画は、猫が不細工な格好で寝ている動画なのだが、その無防備さが気に入っている。

「とうとう田中くんも猫ちゃんの魅力に気付いたみたいですね」

同志を見つけた、と言わんばかりに斎藤は目を輝かせる。

「おかげさまでな」

「猫の可愛さは万国共通ですからね。田中くんがハマるのも無理はありません。猫の魅力はもはやただ可愛いという次元を超えていますし。もはや天使です。神様が人類に与えてくれた宝と言っても過言ではありません。人類はみんな猫を崇めるべきです」

「そ、そうだな」

熱が籠った視線に思わずうなずく。斎藤の猫愛に火を点けてしまったらしい。

「また今度、猫カフェ行こうぜ」

「はい、絶対行きましょう」

「あの白猫は本当に可愛かった」

「あの猫ちゃんは田中くんにやけに馴れ馴れしかったですし、私のこと挑発してきたので、ちょつとだけ嫌いです」

「野良猫の時みたいに猫の声真似をしてみれば意外と仲良くなれるかもしれないぞ？」

「そ、それは忘れてくださいと言ってるじゃないですか！」

ちょっぴりとだけ恨めしそうに睨んでくるが、あいにくと猫語を話してコミュニケーションを取ろうとしていた姿は忘れられそうにない。にゃーにゃー鳴き真似を繰り返す斎藤は可愛かった。

「そもそも、鳴き真似をした程度で変わらないと思います」

「そうか？ だったらもつとクオリティをあげれば？」

「例えば？」

「そうだな……。猫耳カチューシャを付けるとか」

前から斎藤は猫っぽいと思っていた。そんな斎藤の猫姿。ぜひ見てみたい。絶対可愛い。

「するわけがないでしょう？」

「効果があるかもしれないぞ？」

「絶対しません」

予想していたこととはいえ、にべもない。思わず「一回だけでも見てみたかった」と心の声が漏れ出た。あ、と思うがもう遅い。斎藤が耳をピクリとさせる。

「どうしてそんなに見たいんですか？」

「そりゃあ……。可愛いだろうし」

誤魔化すか迷ったが、なんとなくここは押せばいける気がした。斎藤は僅かに目を見開いて頬を染める。

「……でも、猫耳のカチューシャとかありませんけど」

「そこはほら、手で再現してみるとか」

「手、ですか」

分かりやすく両手を使って頭の上に耳を作ってみせる。斎藤はじつと見つめて小さく息を吐いた。

「……そこまで言うなら仕方ないですね。お店では恥ずかしいので絶対やりませんが、今だけなら。特別ですよ？」

「!？」

承諾してくれるとは。渋々とはいえ斎藤を頷かせることに成功してしまった。歓喜に心を震わせる暇もなく、斎藤はすぐにこほんと咳払いをする。

「一回だけですからね」

「あ、ああ」

斎藤がその白い手を頭の上に持っていく。耳の形を作り、上目遣いにこちらを見上げる。頬を薄く桃色に染め恥じ入る姿でこてんを首を傾ける。

「……これでいいですよ？」

まさかの語尾付き。可愛すぎて卒倒した。